

生涯体育を見据えた初等体育教材のあり方 —次期小学校学習指導要領（平成33年実施）を踏まえて—

佐藤 陽 治*

SATO Yoji

平成29（2017）年2月14日、文部科学省は小学校及び中学校の次期学習指導要領の改訂案を公表し広く意見公募を実施している。本稿では、特に小学校の体育教材に関して生涯体育という観点から構築できる教材観を論じる。

「生涯体育」という概念は、平成元（1989）年の改訂の総則で初めて触れられる。総則では、「学校における体育に関する指導は、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする。特に、体力の向上及び健康の保持増進に関する指導については、体育科の時間はもとより、特別活動などにおいても十分行うよう努めることとし、それらの指導を通して、日常生活における適切な体育的活動の実践が促されるとともに、生涯を通じて健康で安全な生活を送るための基礎が培われるよう配慮しなければならない。」（第1章、総則、第1、3）とし、「生涯を通じて健康で安全な生活を送るための基礎が培われるよう配慮」という形で生涯体育（スポーツ）を見通した教育課程編成の一般方針が示されている。近年は底をついたという楽観論はあるものの学童の体力低下傾向はより良い方向へとは向かっていないと考えられ、発育発達を考えた場合の至適生理学的刺激という側面で、学校教育において、特に義務教育課程である小中学校期は体力の向上及び健康の保持増進という目標は前提であり否定しようがなく、戦後の新教育課程の体育においては一貫して貫かれている大目標であり今後も続けざるをえない。この大前提のもとに付加価値として日常での運動への親和、及び生涯にわたっての実践が唱えられ始めた契機となった改訂であった。平成元（1989）年、改訂時の小学校学習指導要領の運動領域および教材運動を初図に示した。低学年及び中学年で、体力低下傾向へ配慮し一般的体力の向上や基礎的運動動作（スキル）の基礎の充足を狙った様々な運動を基本運動として教材化しているのが特徴である。高学年の教材は現行の運動6領域と同様の範疇となっている。

小学校の次期学習指導要領の改訂案では、全国体力テストで低下傾向にあるボール投げ（平成27年度体力・運動能力調査結果の概要及び報告書について、文部科学省、2015年）の改善のため、「内容の「C走・跳の運動」については、児童の実態に応じて投の運動を加えて指導することができる。」（小学校及び中学校の次期学習指導要領の改訂案、3内容の取扱い、（2）、文部科学省、2017年）としており、「投」能力及びそれに準じた「打つ」、「捕る」などの上肢の運動能力は、生涯体育（スポーツ）に資する可能性が高く、一つの見識を示したと筆者は考えている。この考えに沿って考えると平成元（1987）年の改訂では、「投」の運動に関係する教材は、低学年のゲーム領域の「ボール遊び」、中学年の「ポートボール」、「ハンドベースボール」、高学年の「バスケットボール」と、サッカーに取扱いにより容認されているソフトボールだけであり、不十分さが顧みられる。

* 学習院大学文学部教育学科

小学校学習指導要領体育編－平成1(1987)年－学習内容

	第1－2学年	第3－4学年	第5－6学年
A 基本の運動	走・跳の運動 力試しの運動 器械・器具を使つての運動 水遊び 模倣の運動 歌を伴う運動遊び 簡単なフォークダンス	走・跳の運動 力試しの運動 器械・器具を使つての運動* 用具を操作する運動 及び浮く・泳ぐ運動* *：C 器械運動、D 水泳をする場合実施しない	
A 体 操			a 体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動 b 力強い動き及び動きを持続する能力を高めるための運動
B ゲーム	ボール遊び 鬼遊び	ポートボール ラインサッカー ハンドベースボール	
C 器械運動		第4学年：マット運動 第4学年：鉄棒運動 第4学年：跳び箱運動	a マット運動 b 鉄棒運動 c 跳び箱運動
C 陸上運動			a リレー・短距離走 及び 障害走 b 走り幅跳び 及び 走り高跳び
D 水 泳		第4学年：クロール 第4学年：平泳ぎ	a クロール b 平泳ぎ
E 表現運動	(基本の運動： 模倣の運動 / 歌を伴う運動遊 び (簡単なフォークダンス))	身近な生活の中から課題 フォークダンス	身近な生活の中から課題 フォークダンス
E ボール運動		(B ゲーム： ポートボール / ラインサッ カー / ハンドベースボール)	バスケットボール サッカー (ソフトボール)
雪遊び、氷上遊び、スキー、スケートなど			

平成10(1997)年(改訂案)、平成15(2002)年実施の小学校学習指導要領体育編では、やはり総則で、「生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮」と前回の改訂を踏襲しており、体育科の目標でも、「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」としており、「運動に親しむ資質や能力を育てる」というところで生涯体育への繋がりを意識していると考えられるが、副次的目標の域を出ていない。

中図には、平成10(1997)年(改訂案)、平成15(2002)年一部改訂の小学校学習指導要領体育編の運動領域および運動教材を示した。運動領域の扱い及び学年配当は、平成元(1989)年の改訂とほとんど変わらないが、体操が「体づくり運動」と名称を変え、「自己の体に気付き、体の調子を整えたり、仲間と交流したりするためのいろいろな手軽な運動や律動的な運動」である「体ほぐしの運動」と「体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動」及び「力強い動き及び動きを持続する能力を高めるための運動」である「体力を高める運動」を規定し、より体力の向上を直接的に狙う内容となっている。この時の改訂の特徴は、体操という領域名が消え、基本の運動と新たに体づくり運動が加わったことと、ゲーム及びボール運動の領域を「バスケットボール型」、「サッカー型」、「ベースボー

小学校学習指導要領体育編－平成10年（1997）年 / 平成15（2002）年－学習内容

	第1－2学年	第3－4学年	第5－6学年
A 基本の運動	走・跳の運動遊び 力試しの運動遊び 器械・器具を使つての運動遊び 用具を操作する運動遊び 水遊び 表現リズム遊び (簡単なフォークダンス)	走・跳の運動 力試しの運動 器械・器具を使つての運動 用具を操作する運動 浮く・泳ぐ運動	
A 体づくり運動			a 体ほぐしの運動 b 体力を高める運動
B ゲーム	ボールゲーム 鬼遊び 自然の中での運動遊び (雪遊び / 氷上遊び / スキー / スケート / 水辺活動など)	バスケットボール型ゲーム サッカー型ゲーム ベースボール型ゲーム (バレーボール型)	
C 器械運動		4年：マット運動 4年：鉄棒運動 4年：跳び箱運動	a マット運動及び鉄棒運動 b 跳び箱運動
C 陸上運動			a 短距離走・リレー 及び ハードル走 b 走り幅跳び及び走り高跳び
D 水泳	(基本の運動 水遊び)	4：クロール 4：平泳ぎ	クロール 平泳ぎ (背泳ぎ)
E 表現運動系	(基本の運動 表現リズム遊び (簡単なフォークダンス))	表現 リズムダンス (フォークダンス)	表現 フォークダンス (リズムダンス)
E ボール運動			a バスケットボール b サッカー c ソフトボール 又は ソフトバレーボール (ハンドボール)

ル型」に分類したことである。

喫緊、現行の平成22（2009）年の小学校学習指導要領（体育編）の改訂では、「第1章、総則、第1、教育課程編成の一般方針、3、学校における体育・健康に関する指導」で、「日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮しなければならない。」とし、また体育の目標では、「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」（第9節、体育、第1、目標）として、直接的に生涯という言葉を使い生涯体育に言及している。終図は、平成22（2009）年改訂の小学校学習指導要領体育編での学習内容を示したものである。

体力の向上を意識し、体づくり運動が重視され全学年で実施されるようになったことと、運動の教材が6領域として明確になったこと、ボール運動系を「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」に分けたことなどが大きな特徴である。筆者が最も「生涯体育（スポーツ）」に資すると考えている「投げる」、「打つ」、「捕る」など上肢を使う技能は体づくり運動の「多様な動きをつくる運動」の内容の中と、ボール運動系の内容で明確になった「ベー

小学校学習指導要領体育編－平成20（2008）年－学習内容

	第1－2学年	第3－4学年	第5－6学年
A 体づくり運動	ア 体ほぐしの運動 イ 多様な動きをつくる運動遊び	ア 体ほぐしの運動 イ 多様な動きをつくる運動遊び	ア 体ほぐしの運動 イ 体力を高める運動
B 器械運動系	器械・器具を使つての運動遊び	器械運動	器械運動
	ア 固定施設を使つた運動遊び	ア マット運動	ア マット運動
	イ マットを使つた運動遊び	イ 鉄棒運動	イ 鉄棒運動
	ウ 鉄棒を使つた運動遊び エ 跳び箱を使つた運動遊び	ウ 跳び箱運動	ウ 跳び箱運動
C 陸上運動系	走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動
	ア 走の運動遊び イ 跳の運動遊び	ア かけっこ・リレー イ 小型ハードル走 ウ 幅跳び エ 高跳び	ア 短距離走・リレー イ ハードル走 ウ 走り幅跳び エ 走り高跳び
D 水泳系	水遊び	浮く・泳ぐ運動	水泳
	ア 水に慣れる遊び イ 浮く・もぐる遊び	ア 浮く運動 イ 泳ぐ運動	ア クロール イ 平泳ぎ
E ボール運動系	ゲーム	ゲーム	ボール運動
	ア ボールゲーム イ 鬼遊び	ア ゴール型ゲーム イ ネット型ゲーム ウ ベースボール型ゲーム	ア ゴール型 イ ネット型 ウ ベースボール型
F 表現運動系	表現リズム遊び	表現運動	表現運動
	ア 表現遊び イ リズム遊び	ア 表現 イ リズムダンス	ア 表現 イ フォークダンス

スボール型」と種目選択によっては、「ネット型」及び「ゴール型」でも取り扱う運用が可能になっている。ボール運動系を「バスケットボール型」、「サッカー型」などの種目名から離れ、「ゴール型」、「ネット型」に変え内容の運用に柔軟性を持たせたことは秀逸な改訂であったと考えている。

次期（平成32（2020）年4月施行予定）の小学校学習指導要領改訂（体育）では、総則で「健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努めること」とし、食育の推進、体力の向上に関する指導、安全に関する指導、心身の健康の保持増進に関する指導を重視している（第1章、総則、第1、小学校教育の基本と教育課程の役割、2、（3））。スポーツライフの実現という表現は斬新で、体育の運動を通しての全人教育という大きな目標の基、スポーツすること自体も一つの目標であることを明確に示したと考えることができる。また、現行の学習指導要領の目標では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」という表現から、「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成」という表現に変わっており、よりスポーツを意識した目標となっている（第9節、体育、第1、目標）。さらに、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成は、各種運動の特性に応じた行い方の理解や基本的な動きや技能を身に付けることからなると言及し、技能の習得の重要性を説いている。

学習内容は、現行の学習指導要領（平成22（2009）年改訂）の内容とほとんど変わっていないが、既述したように、「第1学年及び第2学年」、「3学年及び第4学年」のそれぞれの学年くくりの「内容の取扱い」で、走・跳の運動（遊び）については、児童の実態に応じて投の運動を加えて指導することができるとし、「第5学年及び第6学年」の内容の

取扱いでも、陸上運動については、児童の実態に応じて、投の運動を加えて指導することができるとし、上肢の体力及び技能の向上を示唆している姿勢がうかがえる。

筆者は、生涯スポーツを推進するためには小学校時代の体育教育におけるコーディネーション能力の獲得が最も重要であると考えている（「スポーツ立国戦略と初等体育教育の新たな意識と役割」、佐藤陽治、学習院大学文学部「教育学・教育実践論叢」、p. 1-20、2012）とともに、楽しく、適度な運動量を持つ生涯体育に適したスポーツ（運動）として道具を使った球技を中心に球技全般を推奨している。そのためには、運動感覚（Motor Sense）はもとより、球技の感覚（Ball Sense）及び道具の感覚（Tool Sense）の涵養が重要であり、運動を通しての「日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践」（次期小学校学習指導要領改訂（体育）（平成32（2020）年4月施行予定）、第1章、総則、第1、小学校教育の基本と教育課程の役割、2、（3））、及び「生涯を通じて健康・安全で活力のある生活を送る」（同前）など豊かなスポーツライフ実現のためにも必要であると考えている（「学習指導要領に見る初等体育の変遷とその生理学的背景」、佐藤陽治、学習院大学教育学・教育実践論叢第3号、p.37-82、2017年3月）。

次期を含め都合4回の改訂で、生涯体育（スポーツ）の重要性が顕著に強化されてきているが、学習内容の変化は著しいとは言いがたい。現行の運動6領域を時間配分等で平等に扱う意識から脱却し、従前からの全人教育としての体育、発育発達上の至適生理学的刺激としての体育は踏襲するものの、球技や道具扱いを重視したコーディネーション能力の向上とスポーツ教育を志向した学習内容を考えてもいい時期に来ているのではないかと考えている。具体例は、今後の課題である。

参考文献

- ・小学校学習指導要領（体育）、平成元年版、文部科学省
- ・小学校学習指導要領（体育）、平成10年版（平成15年一部改正）、文部科学省
- ・小学校学習指導要領（体育）、平成20年版、文部科学省
- ・小学校学習指導要領案（平成32（2020）年4月施行予定）、第2章、各教科、第9節、体育、文部科学省
- ・「『運動嫌い』『体育嫌い』の実態と発生要因に関する研究－小学生・中学生・高校生における『運動嫌い』と『体育嫌い』の関連性に着目して－」：吉川麻衣、山谷幸司、笹生心太、仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集Vol.13、p.107-115、2012. 3
- ・平成25年度全国体力・運動能力・運動習慣調査結果・特徴（小学校）、文部科学省
- ・「スポーツ立国戦略と初等体育教育の新たな意識と役割」：佐藤陽治、学習院大学文学部「教育学・教育実践論叢」、p. 1-20、2012
- ・「学習指導要領に見る初等体育の変遷とその生理学的背景」：佐藤陽治、学習院大学教育学・教育実践論叢第3号、p.37-82、2017年3月